

# ようざん がいさま 養蚕と養蚕民家～人間よりもお蚕様の住む家～

座光寺には二階建ての大きな家がたくさん残っています。これは昔、家の中で蚕を飼った建物です。明治時代から昭和40年頃まで座光寺でも養蚕が盛んで、ほとんどの家で蚕を飼いました。できた繭からとれる生糸は、開国後の日本の重要な輸出品でした。今に残る養蚕に関わる建物から日本の近代化を支えた産業を知り、約100年前の座光寺のようすを思い浮かべてみましょう。

## 養蚕民家の特徴

蚕を飼う建物は、新鮮な空気を入れるため窓が多くあること、身動きが取りやすいように部屋が広いことが特徴です。主屋だけでは足りず別に蚕室を建てたり、また庭には蚕に与える桑を入れておく蔵や、養蚕に使う道具を洗う水場があったりと、家全体が蚕をたくさん飼いやすいようにできています。

## 蚕をどうやって飼った？

蚕は「桑を食べ→寝る→起きる」を5回繰り返します。それぞれ1齢～5齢といえます。

昔は卵をかえすところから全ての行程を各家で行いましたが、小さなうちは手間がかかり飼うことが難しいので、のちに2齢までは共同で飼うようになりました。それから1cmくらいの大きさになった3齢の蚕を各家に持ち帰って大きく育てました。

蚕を飼うための繭を「かごろじ」、それを入れるための棚を「めだな」と呼んでいます。かごろじの上に蚕を広げ、めだなから1枚ずつ引き出して桑を与え、大きくなったかごろじを増やして蚕を分けました。家の中全体で飼ったため、めだなの間で寝ることもありました。

ただ、1枚ずつかごろじを出し入れして桑を与えるの



養蚕風景 (2007年春蚕のようす)

座光寺で養蚕を営む最後の1軒 三村家 (高岡)



主屋と蚕室のある養蚕民家

1905年(明治38年) 改築 宮沢家(万才)



長さ30mもある工場のような蚕室

1912年(明治45年) 建築 片桐家(恒川)



桑養育の様子ーめだなで飼うより飼いが楽になりました。

は大変な重労働です。そこで飼ひ方の工夫が考えられ、昭和30年頃から平たい大きなトレイの中で飼う「桑葉育」が始まりました

5齢が終わると蚕は10cmくらいに大きくなり、透明になってきます。これを1匹ずつ「まぶし」と呼ばれる部屋に入れ、繭を作らせます。これを「上簇」といいます。上簇が一番大変な作業で、近所の人に手伝ってもらって大勢で行いました。

繭ができると、まぶしから繭を取り出し、出荷します。ここまでの行程が約1ヶ月かかります。これを年に3～6回行いました。

## 取った繭はどうなるの？

集めた繭は「製糸場」へ持って行き、ゆでてほぐして糸を取ります。座光寺にも個人製糸場がいくつかありました。できた生糸はおもにアメリカに輸出されました。

なかには次の蚕のため、繭から生糸を取らずそのまま成長させ、卵を産ませる「種屋」を営んだ家もありました。卵が病気になるよう、細心の注意が必要でした。

## 今は蚕を見ないけど？

明治時代以降、繭は高く売れ、景気のよい時代が続きましたが、1929年(昭和4年)に世界恐慌という物の値段が大きく下がる出来事があり、繭の値段もそれまでの半分以下になりました。また絹(シルク)によく似た人工繊維のレーヨンやナイロンが発明され、生糸の需要がだんだんなくなってしまいました。



上簇のようすーまぶしで繭を作る蚕です。



昔の蚕室を利用した柿干し場

明治時代は座光寺だけでも300軒以上の家で養蚕を行っていましたが、昭和30年頃から養蚕をやめる農家が増え、現在は座光寺で1軒だけになってしまいました。養蚕をやめた農家は果樹栽培など新たな営みを始めました。

## 大きな建物はどうなった？

現在、座光寺を代表する農作物の1つに「市田柿」があります。干し柿は柿の皮をむいて干しますが、干すために雨のあたらない広いスペースが必要です。そこで使われなくなった養蚕の建物は柿干し場にちょうどぴったりです。秋になると干し柿でオレンジ色に染まった蚕室を見ることが出来ます。産業が変わっても建物が使えるよい例です。(金澤雄記)

## 豆知識 桑と地図記号

右の図が何か分かりますか？ そう、「桑畑」の地図記号です。

農作物の種類が1つに決まっている地図記号は稲と桑しかありません。あとはまとめて果樹が畑です。桑といっても今はあまり知られていませんが、昔は稲と同じくらい桑が養蚕のために大切な農作物だったことが分かります。

座光寺も昔は家の周りのほとんどが桑畑でしたが、現在はだんだんなくなり、民家や果樹園に変わっています。自分の家の周りてどこが桑畑だったか調べてみましょう。

